

3年ぶりとなる

沖縄での平和の旅

2015年10月17日(土)～19日(月)にかけて、自治労福井県本部青年部が主体となつて、5回目となる「平和の旅」が、10単組、24名の参加のもと開催された。

なぜ沖縄なのか

2015年は、将来の歴史教科書に記載される重大な転機の年となるのではないかと。本来、国民が為政者の行動を制限するはずの憲法を、解釈改憲で捻じ曲げてまで安保関連法案を改正してしまったからだ。これまでのすべての政権が守ってきた二線を、一つの政権が強引に、簡単に変えてしまったのだ。

メディアで淡々と、政治ショーのように流れるニュースに疑問を感じる中、基地問題や安保問題について、参加者に考える機会を持つてもらおうと、今回の行程先に沖縄が選ばれた。

戦跡と基地を両方抱える沖縄で、戦争の現実と歴史を知り、さらに、基地問題から住む人の民意と国の政策との乖離を感じることで、平和から基地に至るまでの個別の問題を、一連の線として理解できるのではと考えたためだ。

米軍の沖縄上陸作戦
沖縄は太平洋戦争で唯一、本土決戦が行われた場所で、沖縄本島

1日目 「戦跡コース」

平和の旅の行程

ルポに入る前に、今回の平和の旅の行程を確認する。今回の平和の旅は3日間で開催され、1日目を「戦跡コース」、2日目を「基地コース」とした(3日目は自由行動)。行動の間は、自治労沖縄県本部から大城智也さんに同行してもらい、バスの中や現地でのガイドと説明を受けた。

沖縄平和の旅行程

1日目	【戦跡コース】 ひめゆり平和祈念資料館 平和祈念公園 糸数壕(アブチラガマ)
2日目	【基地コース】 普天間基地視察(嘉数高台公園) 嘉手納基地視察(道の駅かでな) 辺野古基地予定地視察 (瀬嵩の浜、キャンプシュワブ他)
3日目	自由行動

を強行した。
戦跡コースでは、これらの戦跡を巡り、当時の状況やエピソードを、資料や現地ガイドの話をもとに学習を重ねていった。

ひめゆり平和祈念資料館

沖縄本島南部、糸満市にある同施設は、看護要員として動員され死んでいったひめゆり学徒隊の資料館として「ひめゆりの塔」のすぐ隣に建設された。

資料館には6つの展示室があり、発掘された医療器具や戦場に携帯した品々、生存者による証言などが伝えられている。

第3展示室「解散命令と死の彷徨」では、敗色濃厚となった末に出された「解散命令」後、戦場に放り出されたひめゆり学徒たちの彷徨の様子を伝えていた。ひめゆり学徒の犠牲者123人のうち112名が解散後避難中に亡くなったり、自決したりしており、学



ひめゆりの塔

徒の絶望、戦争に巻き込まれる側の悲惨さと起こす側の無責任さ、そして双方の不公平さを感じた。

第4展示室「鎮魂」に展示された生存者の証言は、淡々と戦争の体験を語り、特に気の知れた友人が目の前で犠牲になる瞬間やその後の苦悩について語られたものが印象に残った。また、その証言者の多くは、当時の状況を思い出したくない、語りたくないと言いつつも、後世に伝えなければとの想いからそれらの証言を残したとのことだった。

◆沖縄県平和祈念公園

沖縄本島南部の「沖縄戦終焉の地」糸満市摩文（まぶに）の丘を南に臨む美しい海岸線を眺望できる台地にあり、園内には、平和祈念資料館、沖縄平和祈念堂、国立沖縄戦没者墓苑、平和の礎（いしじ）などがある。

参加者の多くは、短い時間の中で、平和の礎、特に福井県の戦没



摩文仁の海岸線

者の礎（刻銘者数1,184名）に参拝した。後でわかったことだが、刻銘者の中に、親族の名を見つけた参加者もいた。

台地からは、多くの人が自決した場所とは想像もつかないほど美しい海岸線が望めた。

◆糸数壕（アブチラガマ）

沖縄本島の南部にある全長270mの自然洞窟で、はじめ沖縄戦時に陣地壕として使用され、戦場が南下するにつれて南風原（はえばる）陸軍病院の分室となった。1945年5月1日から軍医、看護婦、ひめゆり学徒が配属され、負傷兵の治療や看護が行われた。現在も平和学習施設として保存され、現地ガイドの同行のもと入壕することができる。

入壕の前には、全員で黙とう、現地ガイドから英霊に入壕報告を行うなど、緊張感があるもので、参加者の口数も少なかった。

実際に壕の中で聞く現地ガイドの説明は現実的で、重苦しいものだった。ガマでの生活、各施設の説明、米軍の攻撃。壕の天井には黒く焼け焦げた後がビッシリと残っていた。これは米軍の攻撃で空気穴から爆弾やガソリンが投げ込まれたことによるものだということだ。アブチラガマでは、5月25日の撤退命令の後、重症患者らは置き去りにされたらしく、自決



アブチラガマ入壕口（内部撮影禁止）



現地ガイドの新城さん

のための青酸カリが配られたという証言もあるのだと言う。

しかし、軍撤退後も継続する米軍の火炎や生き埋め攻撃の中を奇跡的に生き残った負傷兵や住人がおり、彼らは8月にガマを出たらしい。

ガマの中では、全員で懐中電灯を消して、明かりの無い暗闇の状況を体験した。完全な真つ暗闇の中、普通の人々が正気を保てるものではないと思った。戦時中は、猛烈な悪臭（腐臭・排泄物等）と負傷兵のうめき声が響いていたそうだからなおさらだろう。

また、そのような地獄を耐えて

生き延びた人達に、帰郷後浴びせられた言葉はさらにひどいもので、「なぜ生き延びた」「なぜお前だけが」そのような言葉を家族からかけられた生存者は、戦後も苦しみの中を生きたと聞き、戦争が奪うものは、人の命や財産だけではなく、また、戦争が終われば終わることでもないのだと思った。

◆今も続く不発弾処理

戦跡コースを移動中に聞いた内容で印象に残ったことに不発弾の処理がある。沖縄県では、今なお戦時中の不発弾が数多く残されており、週末になると、島のいたるところで不発弾処理とそれに伴う周辺住民の避難が行われているらしい。住宅を建て替える際にも金属探知の実施が義務付けられていたり、不発弾処理の避難指定日が老人会の遠足日となっていたりするなど、不発弾処理が県民の日常生活に当たり前のように入り込んでいることに驚いた。

2日目 「基地コース」

◆沖縄と米軍基地

沖縄県は日本の面積の0.6%に過ぎないが、実在に在日米軍専用基地の約75%が存在している。2日目の基地コースでは、沖縄の在日米軍基地視察として、世界一危険な普天間基地、極東最大の空軍

基地嘉手納基地、そして日米合意に基づく普天間基地の移設地となっている辺野古米軍基地建設予定地を視察した。

ちなみに、労働組合としては、在日米軍基地で働く駐留軍労働者で組織されている「全駐労（全駐留軍労働組合）」という労働組合がある。全駐労で働く人たちは、休日がアメリカの休日になっているらしく、まさに基地の中はアメリカなのだと実感した。

◆普天間飛行場

最初に、世界一危険と言われる普天間飛行場を嘉数展望台から望み見た。人口が密集する住宅地区に囲まれる同飛行場は、世界一危険な飛行場と呼ばれている。米国の法律でも、滑走路の延長上には住宅や公共施設が配置できないことになっているのだが、そのような運用をすると、ほとんどの建物が対象になってしまうためできないだろうとのこと。もちろん、日本の航空安全基準も満たしていないのだが、普天間は日本の法制上の飛行場にあらならないというような解釈で、日本側が「問題ない」と、お墨付きを与えているということだ。

また、なるほどと思ったのは、沖縄県民は基地内を通過することができないため、基地の反対側に移動しようとするひとく遠回り

をしなければならないということだ。普天間基地は宜野湾市のほぼ中央部にある広大な施設であり、その不便さは、相当だろう。

さらに驚いたのは、基地内に自分たちのお墓がある県民がいるらしく、その方たちは、自分たちのお墓にお参りするのにも許可を取るとのことだ。

気になる飛行場の騒音だが、視察した日曜日、米軍基地は休みで、飛行機の離着陸がなく、騒音を確認することはできなかった。10月だったが、その日も沖縄の気温は30度近く、半袖でも暑いほどだった。しかし、付近の学校では、騒音のため暑くても窓を開けることはないのだという。



嘉数展望台から見た普天間飛行場

◆嘉手納基地

嘉手納基地は極東最大の空軍基地であり、広大な敷地と3,500m強の2本の滑走路を持つ。

普天間も大きかったが、嘉手納はそれ以上だった。狭い沖縄には

全く似つかわしくない広大な基地は、まるで北海道の土地の使い方で、基地だけでなく、関連施設（弾薬庫等）にまで及べば視界に入りきらないほどだった。嘉手納町の行政区域のうち、なんと80%が基地だそう。

ちなみに、嘉手納基地の敷地は嘉手納町にだけでなく、沖縄市、北谷町にまたがっている。



広大な面積の嘉手納基地

◆基地の合間に沖縄県がある

沖縄県内をバスで移動している間、最も異常に感じたのはその土地利用の在り方だった。米軍関係者の住宅や公園といった施設は広大な敷地に、まさにアメリカナイズに建てられているのに対して、沖縄県民は、狭小地や丘陵の斜面、アパートなどに密集していた。

沖縄県に基地があるのではなく、基地の無い部分を沖縄県が使用していると言えは言い過ぎだろうが、事実そう感じた。

◆米軍施設が返還された後の施設利用

基地コースの移動中には、過去の米軍施設が返還された場所も通った。特に、米軍のゴルフ場だった施設が返還された土地（ゴルフ場だったときも維持費は日本持ち）は、基地使用されていた場所と違い、変なものが埋まっている心配がないとのことで、地質調査の必要がなく（これも酷い話）跡地利用が進んでいるとのことだった。基地が雇用を生み出すとはいえ、基地としての利用にはそもそも無駄も多く、経済的な影響は必ずしも基地の有無と一致しないとのことだった。

◆Yナンバーの車両

沖縄県内をバスで移動していると、「Yナンバー」の車に出くわす。Yナンバーは米軍関係者の車両に付与されるナンバーだということだった。これらの車両と事故を起こすと、いちいち手続きのために基地に入る必要があり、それらすべてに許可を取らなければならない。沖縄県民はYナンバーには近づかないらしい。こんなところにも米国の優位性は存在している。

◆辺野古米軍基地建設予定地

名護市辺野古は、普天間基地の移設に伴う代替基地の建設予定地となっているが、移設条件付き全

面返還の合意からはすでに19年が経過している。

普天間を移設させたいなら辺野古に基地を作るしかないと考えるのが普通だが、県民は、「辺野古に基地を作ったとしても、普天間から米軍がいなくなる保障はない、沖縄はもう騙されない」という意思でたたかっているとのこと。

◆瀬嵩の浜

辺野古基地の建設予定地を一望できる浜から建設予定地を視察した。くしくも、翁長沖縄県知事による建設許可の取り消しが行われた直後であったため、作業は中断していた。ジュゴンが生息する美しい海を埋め立てて2本もの滑走路を、しかも日本のお金で整備するのだという。

基地移設を実施するのも日本の企業、反対するのも日本の住民で、同じ国民を争わせてしまう構図がそこには存在していた。



瀬嵩の浜

◆キャンプシュワブゲート前 基地建設反対テント村

続いて、基地移設に反対して、キャンプシュワブのゲート前で座り込みを続ける住民のテント村を訪問した。座り込みは、訪問した日で469日目になるそうで、休日も、雨の日も、24時間体制で待機しているらしい。待機していないとテントが撤去されたり、心ない嫌がらせを受けたりするからだ。テント村では、たまたまデモの開始時間に到着したため、参加者もデモに参加することにした。デモは15分ほどで、キャンプシュワブ前をデモ行進した後、ゲート前でシュプレヒコール、歌を数曲歌った。シュプレヒコールの間には、地元の沖縄県警が「道路上で立ち止まる行為が危険」だと警告を行うという異様な光景を目の当たりにした。抗議行動への対応は、まず警備会社、次に地元警察、最後に米軍関係者という順番で配置さ



デモ行進に参加する福井県参加者



立ち入りを禁じる看板



キャンプシュワブゲート前テント村

れるとのこと。警備会社や警察関係者にとつてはかなり嫌な仕事であることは想像に固くなく、ここでも、同じ日本人同士が対立するような仕組みがあった。

ゲート前には、「この黄線の内側からは提供施設内です。許可なく立ち入ったものは日本国の法令により処罰される。」の看板が設置されている。この基地との間の黄色い線は、皮肉を込めて「国境」と呼ばれていた。

◆平和の旅が伝えるもの

自治労の運動の中でも、組合員に理解され難いものとして最初に挙げられるのが平和と政治だろう。そんな中であって、平和の旅は、行った人すべての心境を変えてしまう。それほど印象の強いものだ



平和の旅参加者 辺野古の浜にて

った。ガイドや現地の人達から直接聞く話もさることながら、彼らが伝えようとしなかったり前や日常の中にも、信じられないようなことが無造作に転がる。実際に見て、触れて、感じた歴史、現実、沖縄以外ではほとんど報道されることのないもので、また、想像を超えるものだった。戦跡コースでは、戦争の悲惨さと、平和への思いを繋ぐ大切さを、基地コースでは、今も沖縄を苦しめる基地問題と、日米の間にある強大なアメリカの影響力の一端を感じた。

昨年の自治労中央労働学校で、熊沢誠甲南大学名誉教授は、「労働組合とは何か」との問いに、「労働組合とは、運動を、考え方を伝えていく機関」というように言ったことを覚えている。

平和の旅は、沖縄の人たちが伝え続けていることを、私たちに確かに伝えてくれた。